

東北紀行

Tohoku Travelogue

第44号/2022年6月/編集：丸岡泰(石巻専修大学)

防災から考える身近な地域資源

國學院大學 下村 彰男

今日は地域資源とその管理の問題が、コロナや災害の問題と深く関わっているという話をしたい。また、身近な地域資源への認識・理解について疑問に感じており、その点も話したい。

1 コロナ禍で変化・促進したこと

コロナ問題については、一昨年、本学会で特別プロジェクトで議論をした。60名あまりの参加を得て4班で議論をした。ご覧いただいているのはその中の変容チームのアウトプットだ。行動・受け皿でどう変わってきたのかを示している。

いろんな項目に変化があった。団体旅行が減り個人に変わってきた。また旅行スタイルでは、マイクロツーリズム。そして去年の観光白書では、旅行者数、消費額ともに域内比率が高まっていることが示されている。

星野リゾートの星野氏は以前はインターナショナルのラグジュアリーマーケットを提唱していたが、コロナという機を見て誘致圏の狭いマイクロツーリズムを提唱した。いずれにせよ、この側面が伸びていくのは間違いないと思う。

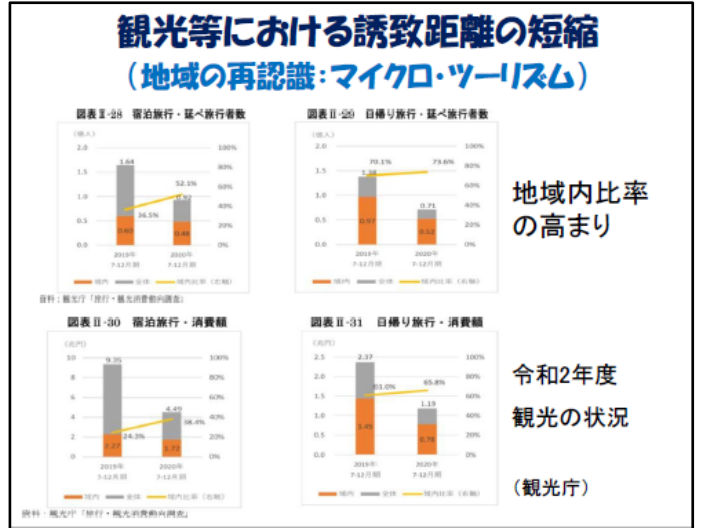
地域資源に関しては普段見えている何気ないものをどう資源化するかが課題。星野リゾートでもスタッフが地域を歩いて資源の発掘をしたと聞いている。

地域をマーケットとして地域資源を売る場合、受け皿側の課題としては地域の資源をどういうふうに演出するかである。

1. コロナ禍で変化・促進したこと		WITHL2(注)	観光地資源のキーワード
観光行動サイトの変容 (マーケット別、客層別)	1. 観光行動の変容 観光行動の減少	観光行動の減少 観光行動の減少 観光行動の減少	観光行動の変容 観光行動の減少 観光行動の減少
観光スタイル	2. 観光スタイル 観光行動の変容	観光行動の変容 観光行動の変容 観光行動の変容	観光行動の変容 観光行動の減少 観光行動の減少
観光地資源の変容 (ハード別、ソフト別)	3. 観光地資源の変容 観光地資源の変容	観光地資源の変容 観光地資源の変容 観光地資源の変容	観光地資源の変容 観光地資源の減少 観光地資源の減少

(一社)日本観光研究学会
新型コロナ特別プロジェクト
報告書 (2021)

第3章 変容チーム
「コロナ禍での観光旅行
形態の変容と今後」



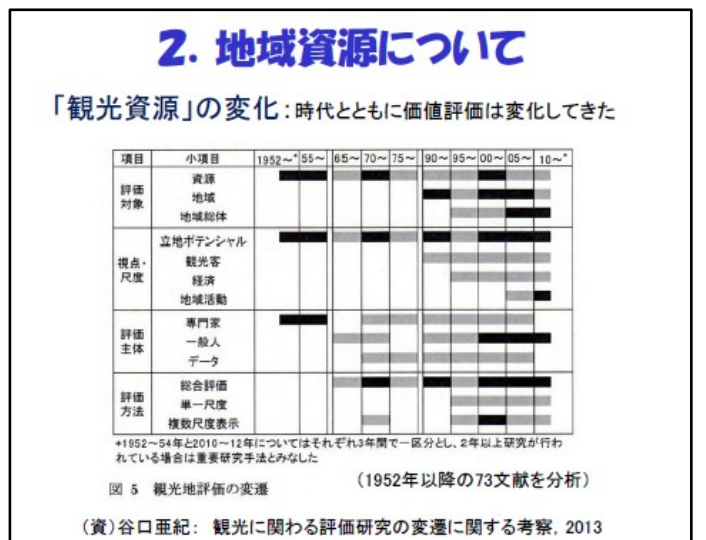
受け入れ側での変化

身近な地域資源への着目: いかに価値を演出するか

【自然資源】

【有形文化資源】

【無形文化資源】



2 地域資源について

地域への関心や価値づけはコロナで急に高まったものではない。1953年からの学術論文の調査では、以前は個別の資源が評価されていたが近年では地域総体が評価されている。また、評価主体も以前は専門家だったが、今は一般の個人が SNS などを使って評価するようになっている。

このように時代とともに資源自身が変化するだけでなく、資源性に対する考え方も変化してきている。

かつて、資源性はア・プリアリに与えられていると考えられ、我々もS級、A級等と固定的に評価をしていた。しかし、里地や里山のように、同じ資源でも時代性あるいは情報提供を通して、その資源性は変化すると、認識が変わってきている。

風景も見えている実像だけではなく、実像を取り巻く情報も構成要素であり、その質・量により資源性が変化する。近代では実像の比重が高かったが、近年、情報の比重が高まってきた。平安時代の「和歌の浦」は、実際に見た人は多くないが、和歌などで資源性が高かったことを考えると分かりやすい。

篠原モデル(篠原修:1982)は、視点と視対象等による実像モデルだが、文化的景観に代表されるように、実像を取り巻く諸情報を含めた風景モデルが提示されるようになってきている。

わが国でも文化的景観という概念や表現は2000年前後から行政の中での扱いに出てくるが、関連の深い「地域資源」という用語も、行政では2000年代から多く使われるようになる。

しかしながら、行政がらみの認定等の評価仕事に参加していると、地域資源について、ちゃんと理解されていないのではないかと思うことが多い。

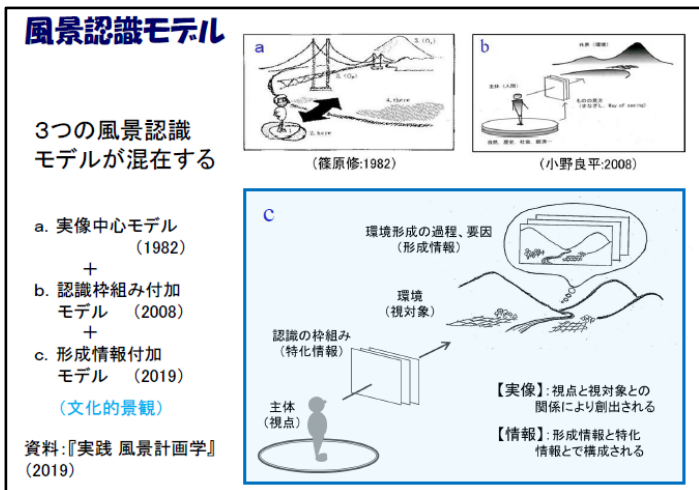
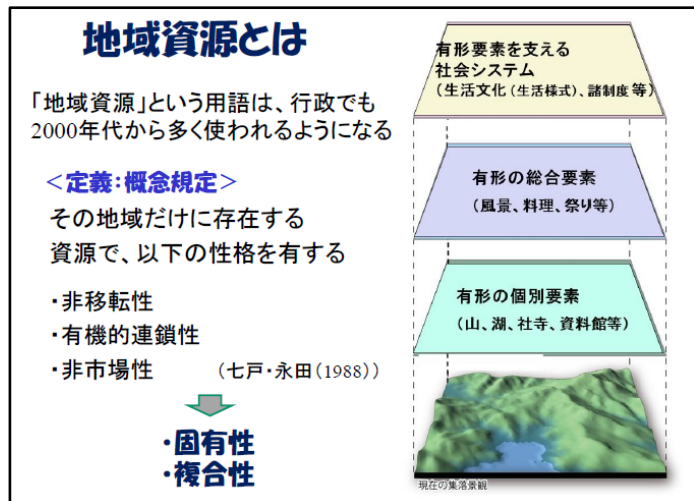
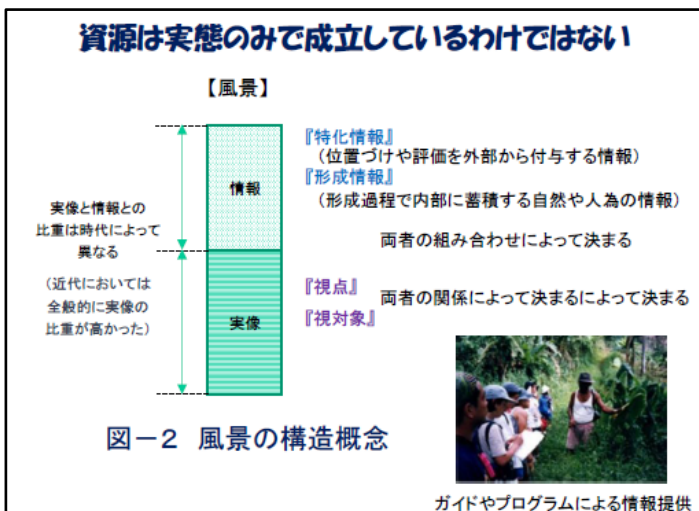
地域資源は、当初、農業経済の分野で検討されてきた概念で、以下の3つの性格を有すると指摘されている。

- ・非移転性
- ・有機的連鎖性
- ・非市場性

市場性は時代とともに有するようになってきたと考えられ、他の二つは、われわれの言葉に言い換えると以下のようなになる。

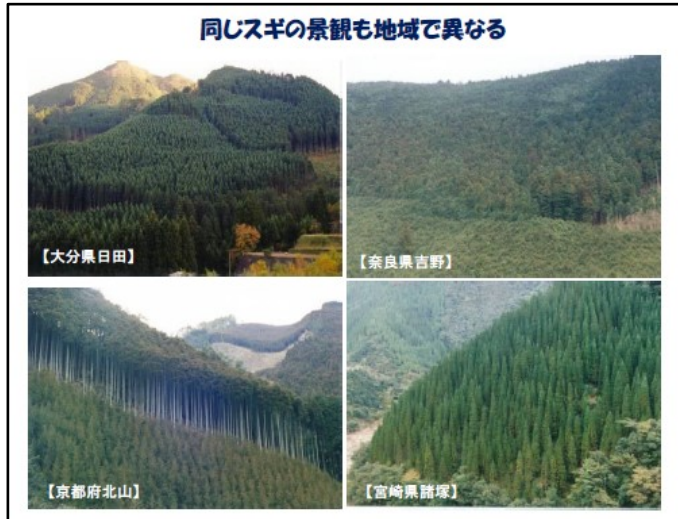
- ・固有性
- ・複合性

地域資源について考え、活用しようとする際に、こうした性格を有していることが十分認識されていない点が課題である。



資源の固有性については、単に、「棚田」や「里山」、「宿場町」「町人文化」といった響きの良い一般的な表現だけでは十分ではない。地域ならではの里山、宿場町の姿や性格について深掘りする必要がある。棚田にもいろいろあり、他の地域と比べてどのような差異があるのか議論されていることが大切だ。地域資源の固有性について議論が足りないのではないか。

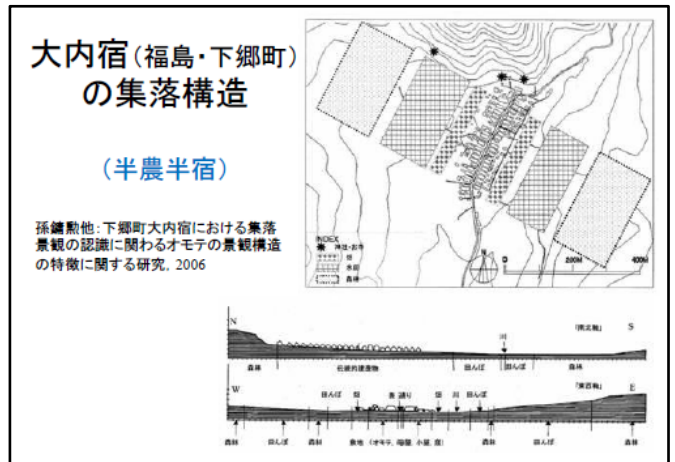
杉山の風景も地域によって違う。生産された材の利用が、家屋等の構造材か、高価な床柱か、吉野のように樽材に使うのか、地域によって風景がちがっている。緑とか山とか、一言で済まされてしまうが、こうした地域差、地域の資源が有する固有性についてもっと考えて欲しい。



宿場町も同様である。福島の大内宿は特徴的で、一棟一棟が別棟になっている。街道が副街道で、宿だけでは食べていけないので半農半宿で暮らしていた。そのため棟と棟との間に玄関があり、街道にも出られるし、裏手の農耕地の方にもすぐ出られる他の宿場とは異なる独自の構造だった。



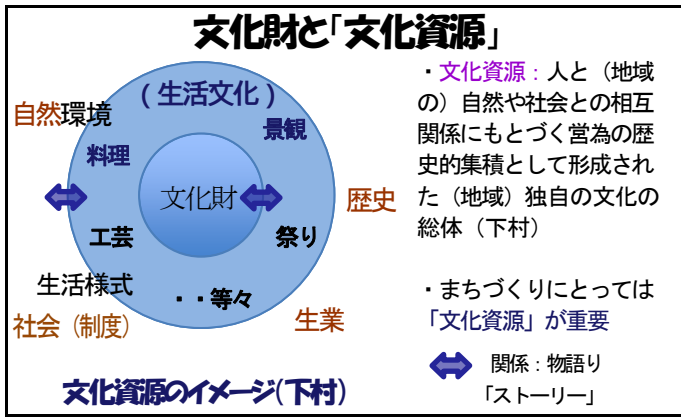
この玄関表の正面だった棟と棟の間が、伝健になって来訪者が増えると、隙間と考えられ商業的に活用されて、農地が見えなくなっている。これは半農半宿であった町の歴史が、その風景から消え去っていくことである。地域資源の固有性を認識していないと、地域の個性を損なってしまうことが起きる。



もうひとつは、複合性である。地域にある個々の資源は「地域」という共通の基盤があり、相互に関連性を有している。文化庁の日本遺産でクローズアップされた「ストーリー・物語」は、こうした関連性を表現することに他ならない。従来は、重要な文化財を個別に価値評価し、それを保存する考え方だけだったが、最近では、複数の資源を複合的に捉え、分かりやすくストーリー化して共有し、皆で守るという考え方も加わってきた。

例えば地域の料理は、地域の野菜や塩、醤油、それを作る樽の素材等と相互関連を持っている。80年代の農業経済の言葉で言う「有機的連鎖性」だ。そうした複合的な関係自体が「ストーリー」であり、地域ならではの特徴、固有性をも表す。

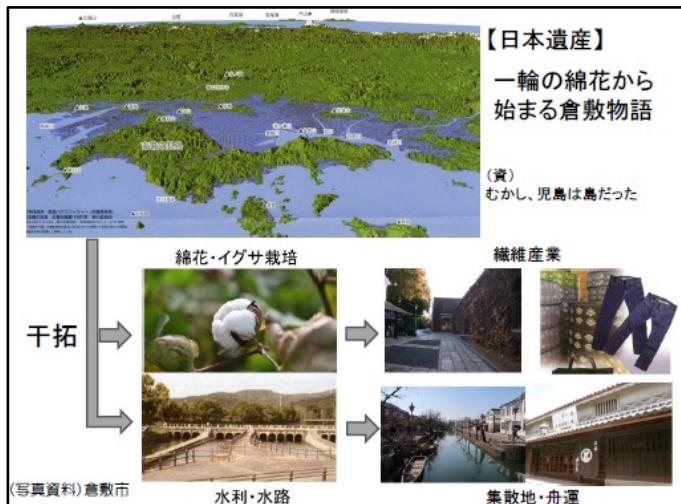




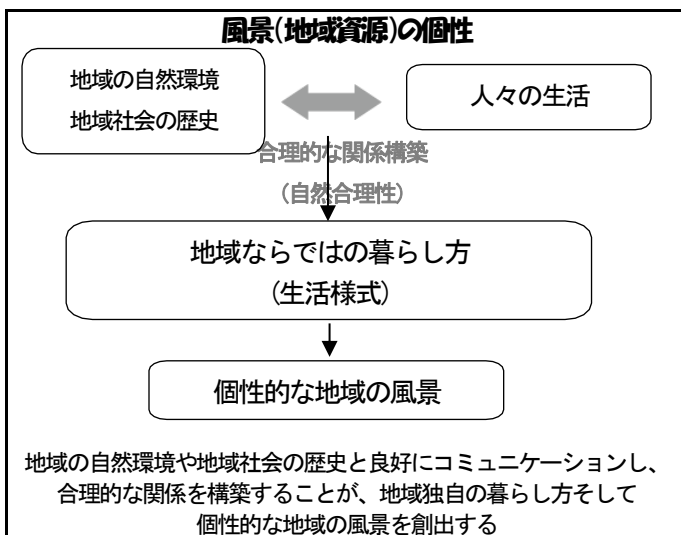
日本遺産は、「地域」という共通基盤の上にある複数の文化資源が相互に関連性を持つことから、それらを面として捉えてストーリー化（筋立て）し、地域のブランディングに活用しようというプロジェクトである。

自然資源も同様であり、核として原生自然があり、人々がふれ合いながら、地域ならではの料理や風景を生み出してきた。

日本遺産の審査をしていると、筋立てや構成が甘いものが多い。地域資源の複合性を十分認識し、伝えることが重要だ。



よく考えられている例は倉敷の「一厘の綿花から始まる倉敷物語」。もともとは島と海で、埋め立てながら舟運を興し、やせた土地で繊維産業を発展させていった。島と海に始まり、埋め立てつつ産業振興してきた歴史をストーリー化している。



地域の生活文化は、人々が地域自然や地域社会と合理的に関係構築しながら歴史の過程で醸成してきたものだ。

自然と文化は、環境省と文化庁、というように違ったものと受け取られがちだが、自然と合理的につき合い生活する中で、表現形としての風景等の地域資源が生まれてくる。人々が地域自然と合理的につき合う中で醸成されるものが地域独自の生活文化であり、そうした観点からは自然と文化は一体的である。

3 防災・減災と地域資源

災害は地域を見直す機会、再認識する機会だが、「のど元過ぎれば熱さを忘れる」となりやすいため、地域の自然とのつきあい方を再構築していく作業が必要だ。

だが、今回（東日本大震災後）も工学的、人為的なもので対応してしまうことによって、地域の伝統的な自然とのつき合い方がもたらす、地域本来のレジリエンス、柔軟性、予防的な強さを取り戻し、育てることに至っていない。



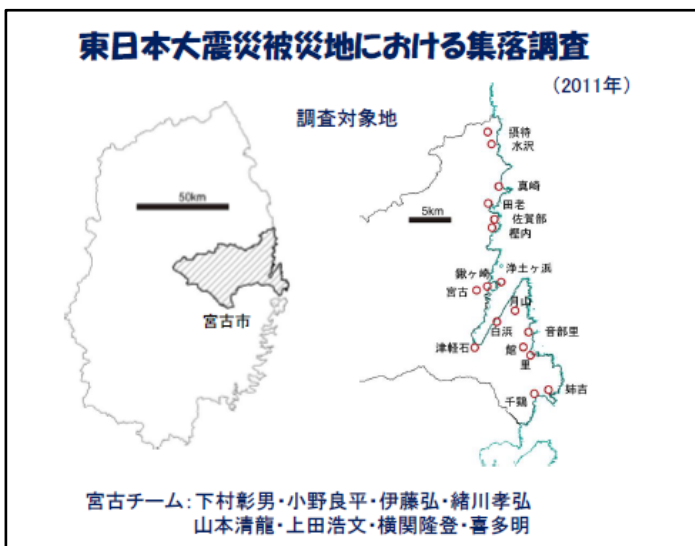
災害対応は地域を見直す機会ということの典型的な例は、屋敷林だ。これは、地域の風や雪などの気象状況や、立地地形などの状況によって各地域固有の姿がある。水田地帯と台地では樹木の構成が違い、水田地帯のイグネ、カイニョでは杉、ハンノキを使うが、武蔵野台地の場合はケヤキやナラの類で構成されている。それから有名な出雲の築地松は微高地の上に成立し、西側と北側に松が屹立する。風等の方向や強さに応じて、屋敷を囲う樹木が構成され、地域ならではの姿が形成される。

沖縄県備瀬では、フクギの屋敷囲いが集まって、防風林のように見えるけれど、中に家がある。集落に入ると大きなフクギが屋敷を囲い、各家のロットが区切られている。フクギが集まって、台風の激しい雨風や強い日差しから守られている。

山形県庄内の海岸林は、防風とともに防砂の役割を果たすために、海岸沿いに幅広の防災林があり、加えて、間に畑をはさんだマツの並木が何列も断続的に展開するという特徴的な風景を形成している。防災の風景は、地域ならではの厳しい自然に対応した姿であり、地域を知る上で災害の問題は大きい。

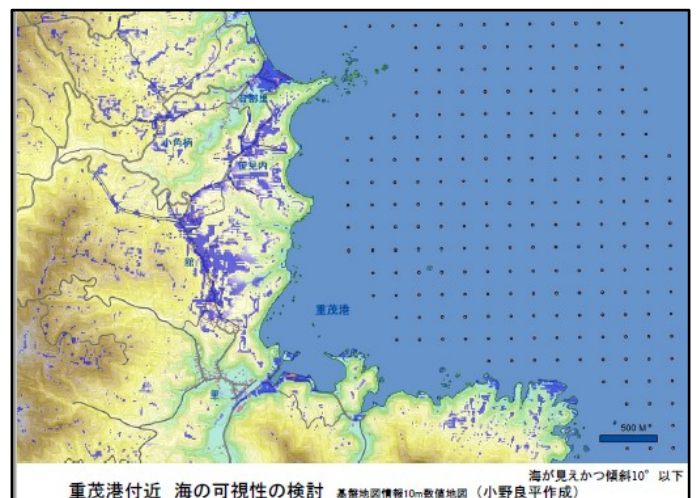
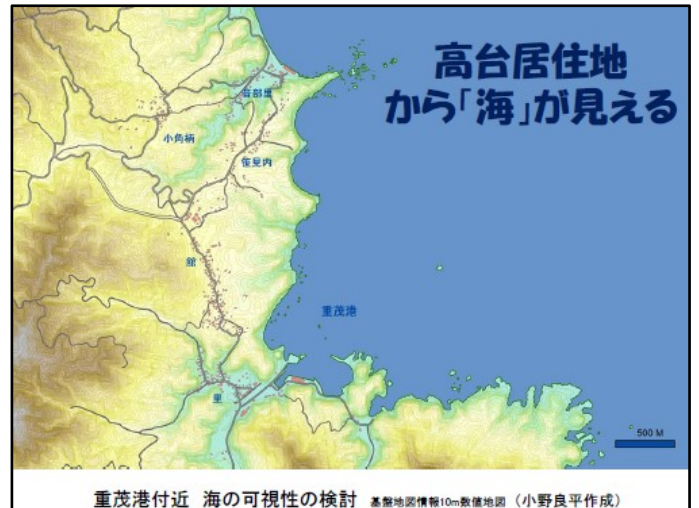


こうした観点から、2011年、東日本大震災直後に造園学会で組織的に被災地の調査を行った。東大チームでは宮古のエリアの集落調査を実施した。調査結果では、居住の仕方における海との付き合い方つまり集落と海との関係が特徴的であった。

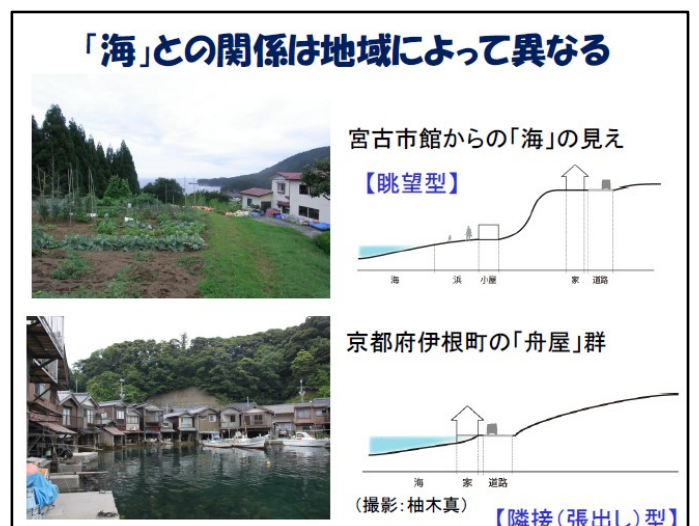


宮古の重茂半島の集落調査で、点々と茶色で示された家屋と道が記されている地形図に、海からの視頻度分析を重ねた。海上の200メートルおきに視点を設定し、陸域が見えるか見えないかを調査した。傾斜が10度以下という条件を重ね合わせた結果図で青の濃いところは、傾斜が緩く、かつ、海からよく見えるつまり海が広く見えるエリアを示している。

海が広く見えるエリアは家屋の集まる集落、古くからの道としっかり重なっている。つまり、本来この地域では津波が来るので高台に居住していた。高台の家屋の写真には漁具が見えており、漁業を営んでいる。高台に住み農業を営み、海の状況を見ながら半農半漁で生活してきたことが分かる。



これと正反対なのは京都の伊根の「舟屋」、ここでは海の脅威がなかった歴史の中で、海の上に差し掛けるように家屋をつくり、階下に船を収納している。宮古では、津波を避け高台に居住し、海沿いには流れてもいい番屋と呼ばれる作業小屋を設置し、二重居住というスタイルである。高台に居住して海と視覚的につながるところと、海と直接に接して生活ができるところ、海との関わり方は地域独自のものだ。



番屋は重要な構成要素

番屋(作業小屋)が居住地と離れて海辺に集積している点が、この地域の特徴なのではないか。
(居住地と生業の場の分離、海辺の低利用)



岩手県田野畑村の「番屋」群

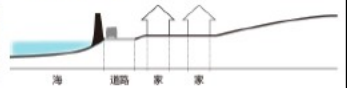
資料: <http://www.vill.tanohata.iwate.jp/banya/>



交通機関等の発達により、作業場も高台へと推移している(笹見内)

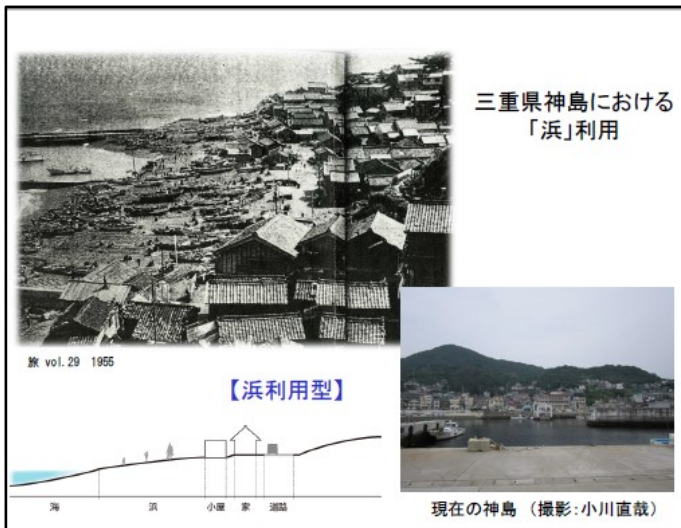
堤防の入口からの「海」
人為(工学的)な対処へ

【遮蔽型】



宮古市重茂半島赤前地区

全国では多くは砂浜に接し、入り浜権にもとづいて、浜を有効に利用しながら漁業を営んできたのが一般的なスタイルだ。



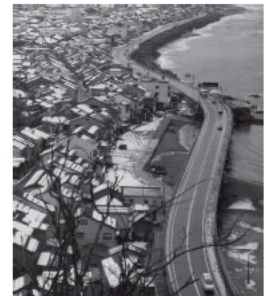
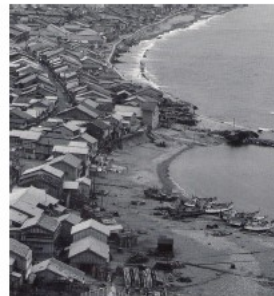
三重県神島における「浜」利用

旅 vol. 29 1955

【浜利用型】

現在の神島(撮影:小川直哉)

構造物の建設整備に伴い、「海」とのつながりは希薄化してきた



新潟県能生町沿岸部の今昔(左:1961年, 右:1999年)

(資料):須藤功「昭和の暮らし3 漁村と島」, 2004, (社)農山漁村文化協会

4 地域資源と観光まちづくり

ここからは、地域資源の扱いや管理について話をしたい。現在では地域資源を基盤とする観光まちづくりが注目されているが、従来、観光は産業・経済ベースで考えられ、まちづくりと結びつく機会が少なかった。むしろ観光の弊害が強調され、観光産業に関わる人とそれ以外の人たちの軋轢が課題となっていた。しかし時代の流れやコロナ、災害等を通して地域資源が注目されることで、観光とまちづくりが結び付いてきた。

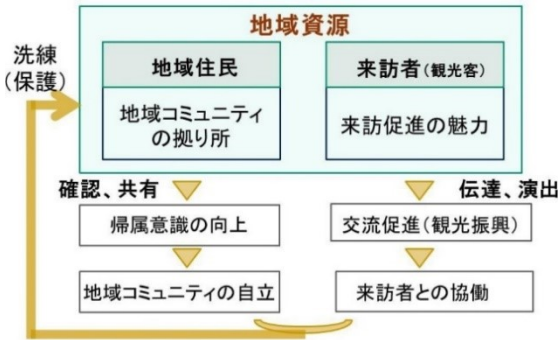
まちづくりから言えば、域外の人との交流を地域の活性化に役立てていくことになる。観光から言えば、持続的な観光の仕組みづくりにつなげていくことになる。いずれにせよ観光とまちづくりがウィンウィンの関係で一体化してきた。今回のコロナで、それが更に促進されたいいなと思っている。

國學院大學で観光まちづくり学部が4月から発足し学生を受け入れ始めたが、それはこうした状況に応えるものである。観光とまちづくりが同様に、地域資源を重要視するようになってきたことで、両者の一体化が進み、文理融合での観光まちづくりが成立してきたと言える。

このように観光まちづくりの根幹にあるのが地域資源だ。観光にとって地域資源が重要性を増しているが、まちづくりにとっても重要な資源だ。コミュニティを再構築し、地域への帰属意識を高めるうえで地域資源が重要であると理解している。近

4. 地域資源と観光まちづくり (地域資源「管理」の考え方)

◎観光における資源が地域資源化（共通資源化）することにより、観光とまちづくりが結びついてきた



代の工学技術は、どのような条件下にあっても、標準化した一定レベルのものを生み出すことがその技術の考え方だ。農学はこれと違って、地域に応じた最大限のモノをアウトプットする技術だ。例えば、地域独自の条件下で、地域の料理に最も適した素材となる地域野菜を栽培するのが農学の技術である。

白保（沖縄県石垣市）の伝統的なサンゴの石垣についても、ブロック化が進み、地域らしさが失われつつある。工学的な素材や技術が多用されることで、風景、地域が均質化している。



風景をはじめ地域資源は地域の人たちの拠り所だ。「同じ釜の飯を食う」との表現同様、風景等の地域資源は、人々が育ち生活する中で地域で共有してきたものだ。近代化により均質化が進み地域性が薄れて、地域の文化的アイデンティティ損なわれ、地域コミュニティが拠り所を失っているのが現状だ。

情報社会では、更に土地や地域コミュニティからの乖離が進むことが心配される。観光とか造園という分野は、人の生活や活動を、地域や土地に引き戻すことが技術的・学問的役割だ。したがって、コミュニティの再構築と地域資源のブラッシュアップとの、循環の仕組みを構築することが課題と言える。

来訪(交流)促進の魅力

地域資源は、観光の重要な資源となってきた

両者が一体化したもの

各地域の個性的な
風景、料理、祭り等

個性を支える(形成する)
独自の生活様式

「地域資源」

「背景」

・日本の各地には多様な風景や料理等があり、資源性に富んでいる。それら地域資源を通して、それを支える生活様式も求められている。



「ナンバー1」から「オンリー1」へ

写真:「平戸島の文化的景観整備活用計画(案)」

「ナンバー1」から「オンリー1」への画期は 2000 年代だった。SMAP「の世界で一つだけの花」のリリース、地域資源という言葉、景観法の制定、文化的景観が組み込まれた文化財保護法の改正、そして観光基本計画もそのころで、2000 年代は社会の価値観の転換期だった。

この新たな価値観に沿って地域の再編成を図る必要がある。工学的な対処によって土地や地域から分離された地域の風景、資源に関して、両者の結びつきを回復していくこと。そして、もう一点、循環的に資源を管理していくこと、持続的（サステナブル）、循環的地域づくりを進めることも課題である。

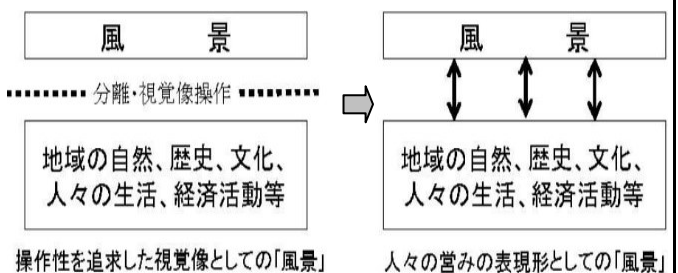
この資源管理における「循環」という考え方は大切だ。従前は、環境省や文化庁の保護行政では、保全と活用の両立という表現を使っていた。それを両者の循環に変えてゆく。

最近では、環境省も「満喫プロジェクト」の中で保護と利用の好循環、という表現を使うようになってきた。単に保全と活用を回すだけでなく、循環には普及啓発（周知共有）や調査研究のプロセスも必要である。周知や啓発によって、地域全体で資源の価値を共有して皆で守っていく。また、資源を磨き価値を高めるためのモニタリングや調査研究を実施する。そして、資源の循環的管理を進めるための財源を、利用を通して確保する。こうした循環的仕組みの構築が課題である。

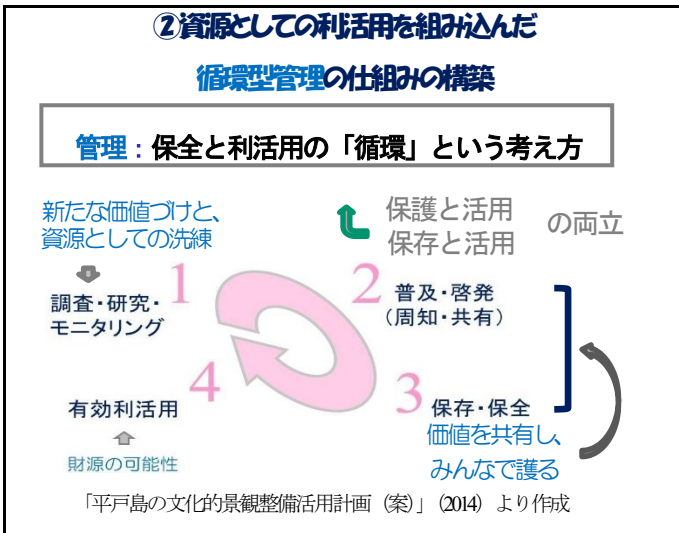
①風景と土地・生活との結びつきの回復

* 近代においては、風景を地域の自然や歴史、文化、人々の生活や生業から切り離すことによって、操作性を高め、視覚像形成技術を洗練させてきた。

* 両者の結びつきを再度、回復していく必要がある。



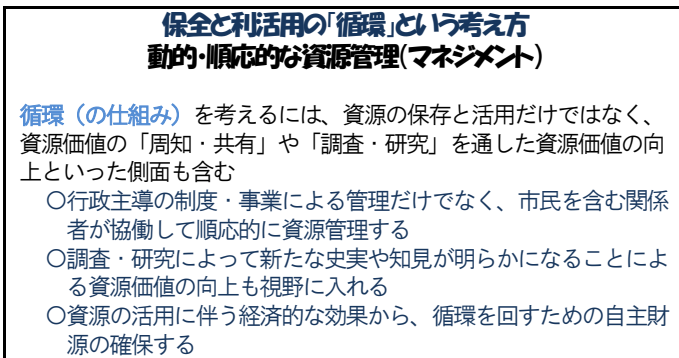
JITR (Japan Institute of Tourism Research) – Tohoku
 れている。原材料費を見ると、宿泊施設で半分、飲食店では3分の2、土産物では4分の3が域外に出してしまう。



a. 資源管理の新たな財源の確保 (例)

(受益者支援による資源管理: 従来とは異なる「お金」の動き)

受益関係	区分	事例
税金	税金	森林環境税、環境協力税、伊豆列島環境保全協力金、愛媛環境保全税、文化のまちづくり市税1%支援事業
	協賛金	直接 駐車場の有料化、チップ割のトイレ、エコステーション(ごみ有料化)、守山ホテルパークアイルランド 上乗せ 金蔵学校(NPO法人やすらぎの里金蔵学校)、富士ファミリーパーク市民いも味のメイト、
商品購入型	直接	FC用紙購入(財)財ナショナルトラスト、オリジナル商品購入(財)ナショナルトラスト、Elook for Forest、西条・山と水のグラウンドワーク、富士山ピンバッジ、プロジェクト染の板、こすびくろぶ
	間接	農業体験ツアー(株)JTB.NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部.NPO法人日本グラウンドワーク、オリジナル商品購入(NPO法人アサザ基金)、エコカード購入(株)コスモ印刷、エコ自動車完備(株)ゲイド(ト)ンコ
一級協力	直接	アサザ基金、トコロのふるさと基金、100平方メートル運動の森、さいたま緑のトラスト、八郎湯環境保全協力金、共有の森ファンド、えごふーむ放牧場ファンド、ドングリの森基金
	間接	うまい! 赤明日プロジェクト(株)アサヒビール、農材インナーシップ(NPO法人 共有の森ネットワーク、NPO法人かみえちご山里倶楽部)、クリック基金(NPO法人アサザ基金、NPO法人日本グラウンドワーク(財)日本ナショナルトラスト(株)HORN)、コンビニ基金(緑のローソン緑の基金)

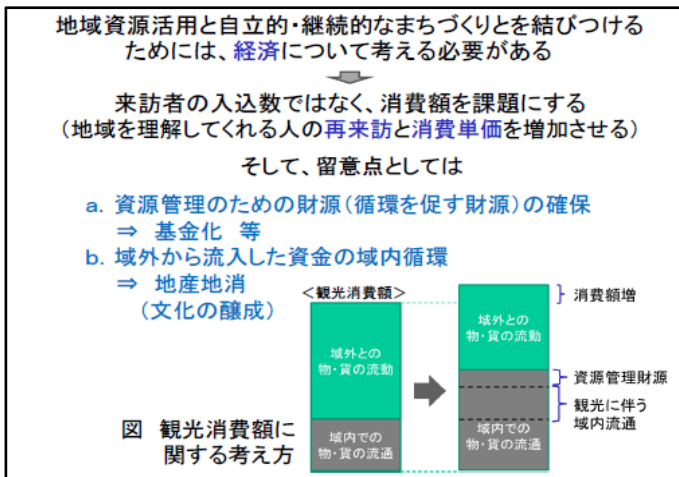


b. 経済の域内循環の促進

由布市における観光消費の動態試算

区分	消費額(億円)	内訳	市内	市外	
宿泊施設	79.8	食料・商品等仕入れ	21.5	11	10.5
		(%)	27.1	13.2	13.9
		他	54.1	42.1	11
		(%)	79.8	29.4	20.4
		小計	79.8	54.1	21.5
利益	(%)	71.6	28.4		
飲食店	10.8	食料・商品等仕入れ	4	1.4	2.6
		(%)	34.2	65.8	
		他	5.8	5.3	0.5
		(%)	90.9	9.1	
		小計	9.8	8.7	3.1
利益	(%)	67.9	32.1		
土産物	11.3	食料・商品等仕入れ	6.2	1.5	4.7
		(%)	46.6	28.4	
		他	3.8	2.4	1.4
		(%)	94.1	5.9	
		小計	10	4	6
利益	(%)	39.8	60.2		

*1:「消費額」については、「平成21年観光動態調査(由布市商工観光課)より
 *2:「内訳」および「市内外」の動態については、以下にもとづき算出
 (「観光環境容量・産業連関分析調査及び地域由布市観光モデル事業報告書」、由布院観光協会、平成18年)

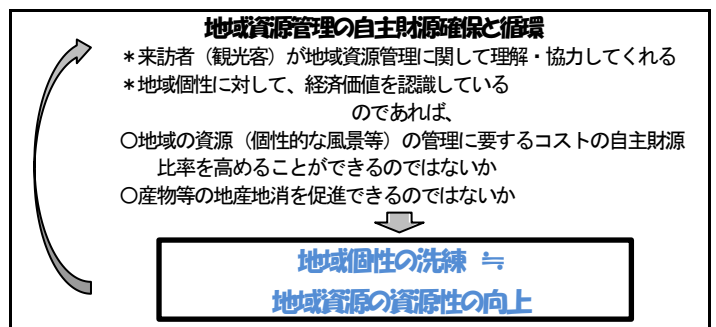


観光により域外から入ったお金の多くは外に出てしまっているが、地域の素材、材料、道具を使い、お金を地域内で循環させて、地域の個性、文化的アイデンティティに結び付けていくことが重要だ。現状を少しでも変えていくことが必要だ。

地域資源の循環的管理の仕組みの構築は、現代における観光の課題だと思う。観光客の支払意志額調査でも、8～9割の人が地域の資源管理に協力してもいい、と回答する時代になっている。観光客の理解、協力を促し、仕組みの構築を進めていくことが重要だ。資源管理の財源確保と、経済の域内循環を高めることが、地域個性を洗練し、資源性を上げていくことにつながり、持続可能な観光にも結びつく。そして、そのことが域外との交流を踏まえた体力ある町づくりにも結びつくだろう。

循環型管理を進めるには、自主財源の確保が重要だ。この点で観光の経済的側面と結びつく。観光消費額を高めることがポイントだが、その中で資源を磨くための財源を確保し基金化することが重要である。さらには地域内でお金を循環させることも重要だ。観光客にお金を落としてもらっただけでなく、資源を磨き価値を高めるための財源を確保するとともに、地域内でお金の循環をはかり、地域個性、文化的アイデンティティを高めることをも念頭に置いて経済展開を図らないといけない。

こうした動向は各地で見られるようになってきている。富士山の入山料のように、受益者に協力金を求める動きもその一つだし、観光の対価の中に資源管理の費用を上乗せするツアーやプログラムも出てきている。観光客への調査結果からも、資源管理への受益者から支援は許容されるようになってきた。また、湯布院での調査では、約100億の観光消費額の多くが域外に流



*5月7日の東北支部研究会講演(遠隔方式)の要約。